

2012年6月から本格的に活動を始めた「放射能測定センター・南相馬（通称：とどけ鳥）」の活動は今、南相馬にとどまり生きていかざるを得ない住民にとって大きな支えとなりつつある。これまでに測定した検体は野菜や土壌、井戸水など 2700 検体を超える。毎日平均 20 検体を持ちこむ住民にとって放射能がどれくらいあるのか、その値は安全なのか、危険なのかを知ることは、汚染大地に生きざるを得ない住民が自らの身を守る大きな手段である。

### 事実を知り、正しく怖がる

チェルノブイリ原発事故で最も大きな影響をもたらしたのは「内部被曝」である。事故から 1~2 年間は路上の粉塵が内部被曝の大きな原因であり、時間が経つにつれて汚染食品が内部被曝の大きな要因となる。これはこの間、ウクライナにおける「菜の花プロジェクト」で協同研究をしてきた、国立シトームル農業生態学大学の M. ディードフさんの分析である。実際、南相馬で分析を始めて驚いたのは、路上の粉塵のセシウム濃度が K g あたり 100 万ベクレルを超え、風が強い日は明らかに空間線量率も上がる、という現実である。汚染した粉塵は路上だけからではない。福島県の森は事故時に飛来した放射性セシウムで強度に汚染しており、森がセシウムの巨大な貯蔵庫になっている。折角除染しても、汚染した枯葉や粉塵が飛来し、森の近くではすぐに汚染が戻ってしまう、という事例は後を絶たない。一方、住民にとって日々の暮らしの中で最大の関心事は野菜やコメ、飲料水等の汚染がどうなっているのかである。庭先で作った野菜が食べても良いのか、畑の土壌汚染がどうなのか、を測定センタースタッフがデータに基づいて住民に丁寧に説明し、住民の納得を得ることで内部被曝のリスクを最小限にとどめる努力が続けられている。こうした努力によって、「とどけ鳥」は住民の間に次第に信頼を得て測定検体数も増加しつつある。

### 野菜の種類で違う汚染

沢山の野菜の分析で次第に汚染しやすい野菜と汚染しにくい野菜の区別が出来つつある。汚染しにくい野菜は、人参や大根、牛蒡などの根菜類、ナスやトマトなどのナス科、キウリ等のウリ科、ネギや玉ネギ、キャベツ

や白菜など多くが K g 当たり平均 20 B q 以下である。一方、豆や紫蘇、落等の汚染は高い。総じて、根が浅く細かく地表に広がっているもの、カリウム濃度の高いもの、原発事故時に葉を広げていた常緑樹（柚子などの柑橘類）や樹皮の凹凸が多く、飛来したセシウムを沢山付着し、内部に吸収した果樹（栗、梅等）等の汚染は高く、汚染は当分続くだろう。こうした情報は汚染地域に居住せざるを得ない住民にとって自ら身を守る手段を提供する。測定センターでの結果では、これまで測定した野菜の 44% は K g 当たり 5 ベクレル以下、25 ベクレル以下は 87% である。こうした現実と大きく反する政府の基準（100 ベクレル/Kg）が風評被害の原因である。

### 移り変わる汚染の態様

これまで、福島産のリンゴや桃、梨などの果樹は大きな汚染がなかった。原因は原発事故時にはこれら落葉樹はまだ芽が出たばかりで、葉がなかったからである。若干の汚染は樹皮からであった。これらの果樹の汚染が低かったのは、果樹園の下草は強く汚染しているが、その下の土壌の汚染はほとんどないからである。しかし時間が経過し、雨で地表のセシウムが次第に沈下し、数年後には土壌に移行するのは避けられない。そうなれば果樹は根からセシウムを吸収し始める。長期にわたる汚染は避けられないだろう。これはチェルノブイリで起こっている現実である。汚染が土壌に移行する前に表土剥離などの対策が必要である。

放射能の汚染は単純ではない。地政学的、生態学的要因が時間とともに汚染の在り様を変え、長く続く放射能との戦いを強いるだろう。（河田）